【ねがいましては】

平成２０年１２月２２日　　*KYOWA SCHOOL*
第２１８号

「鏡」

勉強に深く傷ついた子どもたちに共通したもの・・・。

お母さまたちはどうご想像なさいますか。

彼らは真剣に傷つき、その思い出を抱えながら日々生活しています。

もったいぶっても仕方がないので・・・・・自分の過去を見たくないということです。

自分の過去を自分自身の力で掘り出したくないということです。それには、まず自分で自分を映さなければなりません。自分で鏡を持って、自分をしっかりと見つめることなのです。その顔には、見たくない傷がついています。もう治ることのない『アザ』として見る子もいるでしょう。変形してしまった自分の顔を見る子もいるでしょう。怖くて見ることができません。

私も人生半世紀を生きてきました。１０代、２０代、３０代・・・・・当たり前といえばそうですが、確実に老けていきます。おじさんになったものだ。認めたくはありませんが、事実がそうなので・・・。かといって分かってきたことがあります。心の面は成長しているかもね！

お読みになっているお母さま方も、（ごめんなさい）確実に大人の顔に変化しつつあるわけです。毎日のお化粧にも力が・・・・。（ごめんなさい）

というわけで、毎日鏡を見ることが楽しくて楽しくて、という方も少ないものと察しています。もしそのような方がおられるとしたら、何かの童話にあったような・・・・・。

子どもたちに一度くっついた勉強からの『こころの傷』は、ほとんどの子が恐怖心としてそっと片付けます。その傷に触れなければ、そこは『人は忘れる生き物』、結構楽観的に過ごせます。笑顔で生活できるのです。

さて、本題に入る準備が整ったようです。

子の一番近くにいる人は一番のお医者様であること、これが最も効果的でしょう。病院に入院するのもその効果を最大限発揮するためであるはずです。病巣部分にほんのわずかでも変化があれば即座に治療に入れるからです。勉強で痛んだ子の心を一番身近で修繕できるのは誰でしょう。学校、それとも家庭・・・・・。

そのどちらでもないとしたら、心の修復は行われません。（私はここがその場所だと思っています。）

私が感じるのは、子どもたちの心の修繕場所をしっかりと持っている子は少ないのではないかということです。

学校ではテストが返却されるたびに、即座に点数蘭を折ってしまう子。その点数が見えたといってからかう子。体育の授業では、それこそ上手い下手が如実にわかってしまいます。体育はハジをかく姿をみんなで見ましょうの会になってしまいます。図画工作然りです。書道なんかもバッチリかな。

学校では評価がたくさん溢れています。

そして家庭に戻ります。その評価を捕らえて、まるで核分裂のように増幅させて攻撃の一途を続ける方がいます。誰かはご想像下さい。子はすでに充分傷ついています。その傷をピンセットで、また大きくして見せているようなものです。「ほらご覧なさい・・・・・。」（ちょっと怖い表現でごめんね！こどもたち！）

お母さんの腕の中でスヤスヤと眠りたい。そして眠りから覚めたとき、その傷が癒されていたら・・・。

子の願いはただひとつです。お母さんが一番のお医者さまなのです。

中学校では３者面談が行われているようです。子どもたちは口々に「あーあ・・・・・。」

それがどのような心なのかは、お母さまご自身が自身の中学生時代にさかのぼっていただくことです。ご自身の過去を鏡に映してみてください。

わたしはよく子どもたちに、「ここはテストも成績も、宿題もないよ。そのときを精一杯に生ききっているかを見させてね。もし、その生き方がいいかげんであったりしたときには、しっかりと叱らせてね。それは心のことだから・・・。」まだ続きます。「ここは心に怪我をさせることは絶対にあってはならないところ、心の怪我はすり傷や切り傷なんかより、ずっと消えにくいんだよ。だから真剣に叱らせてね。」まだまだ続きます。「もし、ここにいる子たちが思いやりに満ちた子になり、それをまわりの人たちにどんどん配っていくようになったら、きっと『いじめ』がなくなると思うんだ。」まだまだ「だから、持つんだよ・・・『小さな勇気』をね！・・・その勇気を使うことができれば、こんどは勉強にその勇気を使おうよ。自分で見たくない、見ることのなかった辛い勉強の思い出に、正面からぶつかっていこうよ。私はそのお手伝いがしたいんだよ。」

この内容に似たことは、日常茶飯事にしゃべりまくっています。

さて、お母さま方にちょっとお願いがあります。確認のお願いです。

お子さんの成績が上がったことからの喜びと、お子さんの中に住み着いている恐怖心をそっと取り除いてあげた後の、お子さんからのひとこと・・・「ありがとう」・・・・・。

私の願いはただひとつです。『温かい家族』・・・良き年になるよう願っています。子どもたち、ありがとな！